

街道物都々逸研究

菊池真一

東海道や木曾街道の宿駅に因んだ都々逸を並べたものとして次のような本がある。

- 一、『彩画独々逸五十三次』（弘化四年か嘉永初年）
- 二、『芳此五十三駅』（嘉永年中）
- 三、『絵本どいつ惣まくり』（嘉永二年刊か）
- 四、『膝寿里日記』（嘉永末年刊）
- 五、『東海道五十三次どいつ』（安政三年）
- 六、『度独逸大成後集之後冊』（安政六年）
- 七、『東海道五十三次気さんじ都々一』（明治元年十一月から明治四年七月の間）
- 八、『木曾海道六十九次気さむじ都々逸』（明治初年）
- 九、『よしこの故能和多橋』（明治十三年）

以下、詳細に見てゆく。

一、『彩画独々逸五十三次』（仮題。関西大学図書館所蔵。図書番号 H911.91 / D1 / 1）

後補表紙に「彩画独々逸五十三次 全」と手書き。表紙は絵のみで題はないが「小信画」とある。これが長谷川小信だとすると、生れは安政六年（1859）、没年は明治十九年（1886）である。本自体は幕末の雰囲気であるが、小信の關係からすると明治初期の成立となる。あるいは、別本の表紙を取り合わせたものかもしれない。

本書奥付の広告中、「投扇曲芳此源氏」は、神戸大学に弘化四年（1847）刊本を所蔵することである。「なげ扇源氏よしこの」これを直近出版物の広告とすると、本書は弘化四年か嘉永初年の刊行ということになる。

実は、本書は次項、菊池所蔵の『芳此五十三駅』とほとんど同じ版面である。本書がまず成立し、『芳此五十三駅』はその版木を流用して作成したものであるのではないかと推測される。したがって、「小信画」とある本書の表紙は後で取り合わせたもの、本自体は弘化四年か嘉永初年の版行と推定される。菊池所蔵の『芳此五十三駅』はその後、嘉永年中の版行ではなからうか。

以下、関西大学蔵本の翻刻。

彩画独々逸五十三次 全（表紙）

小信画（表紙）

古語に曰旅はうひものつらひ者其つひ事もつらひのも何にも不知に三味線の三筋の糸のいと道を唱（うた）ふてゆけば大江戸から花の都の道すがら名所

名産残りなく知れるは重宝居ながらに名所として歌よみの其上をこす五十三
駅(つぎ)よしこののくたぶるゝのは口計り馬にもらず籠にも乗ず鳥渡小休
(こやすみ)茶に煙草そこを気どつてあつかんて一杯やつて又いそぐこんど
は立場の長休みちやうしのつぎめ継ぎをやまのおさえの大かんのかの道草を
くふ其内に招婦(おじやれ)が客をひくれころこゝちに宿をいきをひの春き
らさぎ旅立よしとい日にしるす 紅葉亭二敷(一才)

(絵)(一ウ)

(絵)月の名処雪までまるる恋といるとの花の東都(ゑど)
花がとりもつふたりのなかはもめたせりふの隅田川(二才)

一品川 エ二リ

くろふはな川そのかひもなくまたもふらるゝすゞか森

あゝ。思ひはアノいざり舟よことごとにこがれゆく

二川崎 エ二リ半

恋の川さきわたしがこゝろぬるゝたもとにそでのつゆ

つくすまことは大師のおかげすゑは世にでゝあらわれん(二ウ)

三神奈川 二リ半

文のかな川かしくでとめる今朝わくぜつでとめて見ん

あかりかねますさぐつて見てもふしの人穴おくふかひ(三才)

四程ヶ谷 エ三リ九丁

いつもおせじのよきほどかやにまもひかれてまよひくる

ほつておかんせやき餅坂よわしのおとしやまゝにする

五戸塚 エ二リ九丁

文はてつよく千束になれど返事なきゆゑ猶くるふ

弓矢八まんちかひをかけてひきはせぬぞえどこまでも(三ウ)

六藤沢 二リ

こゝはぶぢ沢左りを見ればうつる江のしまうばがしま

わたしや小栗のくるまもひくにぬしは手をおく下こゝろ(四才)

七平塚 三リ半

ごめんまつ平塚まえられた無理な座しきの其つらさ

八大磯 廿七丁

人目のびて大磯がしくかいた文さへあとやさき

すいな梅さわお茶屋のあるじくんでしらんせわしの気を

九小田原 四リ

なにを言ふても(四ウ)おだわらばかりたのみがたなきひとこゝろ

若ひ二人の花水ばしはかけて渡したこひの道

ぬしとわたしは小田原うゑるうまゐ名なれどにがひなか(五才)

十箱根 四リ八丁

ぬしをあづまに残しておみてこすにものうき箱根山

あわれふたゝび花咲春にあふて時めくかれ木坂

十一三島 一リ廿八丁

みじまひするのもたゝうつとりと袖を(五ウ)ぬらすは涙か化粧の水

朝夕おがんだ其御かげやら顔をみしまの神のおん

十二沼津 一リ半

いやなぬまずの千本松はまつがおゝひでじれがくる

むねは沼津のおどりこ汁ようまひ文句をくわされて(六才)

十三原 一リ半

いふにいわれぬたかひの原をかほとしうちでさとりあふ

旅にゆくならせいしをさんせ三とせさきにて(六ウ)さらぬやう

十四吉原 三リ

わしは浮世の吉原雀なひてくらしてあるわひな

かくや姫かとおどろくばかりちらと見そめたやぶのうち(七才)

十五蒲原 三リ

酒のかんばらぬるひは御めん私やかんしやくで茶わんざけ
名さへわかれの明神さまときくもいやたよきにかゝる

十六由井 一リ

ほかへやるとはわたしの心由井の浜なる親しらす

さつた峠はまたさきの事ふるひあわびのかたおもひ

十七興津 二リ十二丁

ほつておき津のおまへの気をは「(七ウ) 汲ましてしらすゝ田子の浦

ぬひだ羽織は羽衣ならでかへしやせぬそへゑりまても

十八江尻 一リ二丁

文の返事そのなかぬまはわしをだませる狐ざき

首尾が江尻でしがなふ逢ふにちわとくぜつで夜をあかす「(八オ)

十九府中 二リ廿六丁

おつなはなして安倍川こへて府中とまりがゑんのはし

そつと手越に渡した文の返事千寿はうらめしや「(八ウ)

二十鞠子 一リ半

一ト夜ふたよとまつ夜をかまんつくやまりこのかづよりも

いつもぬらくらおまゑのへんじいやよまり子のとろゝ汁「(九オ)

廿一岡部 一リ

瀬戸の染つゝ見そめてもめていつか黄まゝになれるやら

つたの細道うちわなくなたし秋風ふくかとむねをうつつ山

廿二藤枝 一リ廿九丁

わしはふぢ枝今宵もあだにまつにかゝるも馬鹿らしい「(九ウ)

たれにかたみとむかしの人がぬひでおきたるゑほし岩

廿三島田 二リ八丁

耳にかゝるはおまへの噂しま田くづしの髪よりも

けふは別れとおもひの外に雨でとまつた大井川「(十オ)

廿四金谷 一リ

かたひ金谷の心をたより末のすえまでいひかわす

こがれこがれた今宵の逢瀬川のあいたる心もち「(十ウ)

廿五日阪 一リ廿四丁

日坂の山か石なら夜ばかりなれどひるもかわかぬ袖たもと

うまくころばす手くだとしれどくへばにくなひわらびもち「(十一オ)

廿六掛川 一リ廿九丁

一時もはやふ身まゝと神々様へねがひかけ川朝まいり

わるひはらだよだましておひてあとでわらふはおいけ町「(十ウ)

廿七袋井 二リ十六丁

もろたきせうも大事二かけてかゞみ袋井しもてある

わしのまことはごんげんさまもみかのはしだよどこまでも「(十一ウ)

廿八見附 一リ半

つゝみかくすもいまゝでの事見付られたら百年め

うどんそばかようち？ゝかれて居てもそひたいぬしのそば

廿九浜松 四リ八丁

わしの言ふ事浜松かぜとそらにふかしてにくらしい

うけたうたかあしのはら池であるてみたいなどこまでも「(十二オ)

三十舞坂 二リ半十二丁

蝶の舞ざかあらしほらしやいづれなたねによるわひな

深ひ中をばいまきれなどゝ親の邪見のよこわたし

卅一新居 海上一リ半「(十二ウ)

あら井だてすりやみなみのつまりどふで人目の関やぶり

卅二白須賀 一リ廿四丁

こぬを白すかふけ行かぜにほそるひかげがかりふる

すき丸作「(十三オ)

二タ川 一リ十七丁

二タリ川らす未まつみでもとふざあわずにやくらされぬ

吉田 一リ半二丁

よしも行きもわきまへながらほれりやくだらぬくちもでる」(十三ウ)
すひたどしは義理立してもひとよ酒かやなれやすい
(ママ)

いやな御油どのゆだんはならぬいつもむほんのできどころ

よそにます花ありともまゝよすぐなみさほの竹の庄」(十四オ)

卅六赤坂 十六丁

うわさしられてかほ赤坂にそれで世けんえさとらるゝ

わしは長はん牛若さんのよふなどのなら命でも

卅七 藤川 二リ九丁

花のふぢ川わたしのこゝろもつれもつれてとけかぬる

義理できても」(十四ウ)なを行末はついにそうだの郷(さと)じやまで

卅八岡崎 一リ半七丁

うわきやめたら岡崎ざきをあんじすごしの苦の世界

いふははづかしいはねばしれずなんと矢はぎのはしばしら」(十五オ)

卅九池鯉鮒 二リ廿九丁

かぜに池鯉鮒くあの紅葉々もみづにせかれてゐるわひな

硯引よせしあんにくれてしばしかりやのうでまくら

四十鳴海 二リ三十丁

よその咄もきづもつあしはあせに鳴海のひとしほり」(十五ウ)

なほもねがはん観音さまにかけるねがひに笠かけて

四十一宮 一リ半六丁

義理と世間のおもわくかひてくるふしとげた今を宮

あわぬかほしてすましてゐれどどこかことばのさやまわり」(十六オ)

四十二桑名 海上七リ

すきと桑名のよひ中どしはいつかふたりでかせぎ出す

桑名かあたよとけふこの頃は貝を焼ので履気らし」(十六ウ)

四十三四日市 三リ五丁

ながくあわぬとゆびおり見ればたつた日かずも四日市

ふかひ中をば追分られてたよりまつまも日ながむら

四十四石薬師 二リ廿七丁

里にそだちしわたしじやけれどかたひ心の石やくし

むかし大将のさゝれたさくら今に花さく春もある」(十七オ)

四十五庄野 二十七丁

せふのわるひときいてはあれど世事でまよひの種になる

世話を焼ごめほうかありんきほつてをかんせよその恋

四十六龜山 二リ

すゑのちぎりは此かめ山で」(十七ウ)ちとせすぎてもかはりやせぬ

人眼せき川やうやうこえてあいにおちはり村とまり

四十七関 一リ半

せきにせかれたふたりのなかも胸のしがらみいつをける

追分けられたる其うへにまだせきの地藏さんが横にらみ」(十八オ)

四十八坂の下 一リ半

さかの下から出てくどかれてつよひいきぢもどこへやら

いけんしかけりやわがよきよふによこに出かける蟹が坂

四十九土山 二リ半」(十八ウ)

顔にぬられた土山なれと心ひとつてあるて見しよ

まは？かねたる筆すて山をすてゝしもふて口でいふ

五十水口 二リ半七丁

いややおよしよみな口々にそんな世界じゃないわいな

みづにまはり気よしてもおくれ夏見すゞしき心太(こゝろぶと)(十九才)
五十一石部 三リ半三丁

こひしこひしは石部のしゆくよ恋の重荷といまはなる

親の目川をしのんできたにあひに田楽きがつよひ

五十二草津 二リ半十七丁

どつさくさつのなかもしばし(十九ウ)しんのはなしもおく二かゝ

文のかよひもきびしさおきて中のたえたるせたのはし

五十三大津 三リ半六

わしの思ひは大津画げほうはしごかけてもとゞきやせぬ

恋しみやこがちらちらみゆる大津八丁ふたのつじ(二十才)

京 三リ半

どんな人でも心のまゝに哥でなびかす御しよ女中

薪をいたゞくあねさんまでも姿やさしき京そだち(二十ウ)

投扇曲芳此源氏 出版 魁春亭貞芳画

「今時晴」 芳此壺万集 初編より十編迄近刻

心齋橋通ばくろ町角

河内屋茂兵衛

柏原屋儀兵衛

綿 屋喜兵衛

河内屋新 助

合梓(裏見返し)

関西大学図書館蔵書は、著作権の切れたものについては、許可を願ひ出ることなく、自由に翻刻してよいことである。弘化四年か嘉永初年の版行と推定されるので、著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。

二、『芳此五十三駅』(菊池真一所蔵)

作者不明。表紙に「貞芳画」とある。この歌川貞芳は、生没年不詳。天保から明治にかけて活動したらしい。絵や本の状態からして、この『芳此五十三駅』は次項の『東海道五十三次どゞいつ』(安政三年)よりも古いものと思われる。前項『彩画独々逸五十三次』との関係から、その版木を流用した嘉永年中の刊行と考えておく。

菊池本は、丁付けからすると、一・二・十三・二十の各丁が欠けているようだ。

以下、翻刻。振り仮名は一部を除き省略した。

芳此五十三駅

貞芳画(表紙)

芳この集(見返し)

すゞか森

わしか思ひはアノいざり舟よことよことにこがれゆく

三神奈川 二リ半

文のかなかわかしくでとめる今朝わくぜつをとめて見ん

わかりかねますさぐつて見てもふしの人穴おくふかひ(三才)

四程ヶ谷 五三三九丁

いつもおせじのよきほどかやにまたもひかれてまよひくる

ほつておかんせやき餅坂よわしのおとしやまゝにする

五戸塚 五二九丁

文はてつよく干束になれど返事なきゆる猶くるふ

弓矢八まんちかひをかけてひきはせぬぞえどこまでも(三ウ)

六藤沢 二リ

こゝはふぢ沢左りを見ればうつる江のしまうばがしま
わたしや小栗のくるまもひくにぬしは手をおく下こゝろ」(四才)

七平塚 三リ半

ごめんまつ平塚まえられた無理な座しきの其つらさ

八大磯 廿七丁

人目のびて大磯がしくかいた文さへあとやさき

すいな梅さわお茶屋のあるじくんでしらんせわしの気を

九小田原 四リ

なにを言ふても」(四ウ)おだわらばかりたのみがたなきひとこゝろ

若ひ二人の花水ばしはかけて渡したこひの道

ぬしとわたしは小田原うゑるうまゑ名なれどにがひなか」(五才)

十箱根 四リ八丁

ぬしをあづまに残しておめてすにもものうき箱根山

あわれふたゝび花咲春にあふて時めくかれ木坂

十一三島 一リ廿八丁

みじまひするのまたとつとりと袖」(五ウ)をぬらすは涙ノ化粧の水

朝夕おがんだ其御かげやら顔をみしまの神のおん

十二沼津 一リ半

いやなぬまつの千本松はまつがおゝひでじれがくる

むねは沼津のおどりこ汁ようまひ文句をくわされて」(六才)

十三原 一リ半

いふにいわれぬたかひの原をかほとしうちでさととりあふ

旅にゆくならせいしをさんせ三とせさきにて」(六ウ)さらぬやう

十四吉原 三リ

わしは浮世の吉原雀なひてくらしてゐるわひな

かくや姫かとおどろくばかりちらと見そめたやぶのうち」(七才)

十五蒲原 三リ

酒のかんばらぬるひは御めん私やかんしやくで茶わんざけ
名さへわかれの明神さまときもいやたよきにかゝる

十六由井 一リ

ほかへやるとはわたしの心由井の浜なる親しらず

さつた峠はまたさきの事ふるひあわびのかたおもひ

十七興津 二リ十二丁

ほつておき津のおまへの気をは」(七ウ)汲ましてしらすゝ田子の浦

ぬひだ羽織は羽衣ならでかへしやせぬそへゑりまても

十八江尻 一リ二丁

文の返事そのなかぬまもわしをだませる狐ざき

首尾を江尻でしがなふ逢ふにちわとくぜつで夜をあかす」(八才)

十九府中 二リ廿六丁

おつなはなして安倍川こへて府中とまりがゑんのはし

そつと手越に渡した文の返事千寿はうらめしや」(八ウ)

二十鞠子 一リ半

一ト夜ふたよとまつ夜をかまんつくやまりこのかづよりも

いつもぬらくらおまゑのへんじいやよまり子のとろゝ汁」(九才)

廿(ママ)岡部 一リ

瀬戸の染つゝ見そめてもめていつか黄まゝになれるやら

つたの細道うちわなくらし秋風ふくかとむねをうつの山

廿二藤枝 一リ廿九丁

わしはふぢ枝今宵のあだにまつにかゝるも馬鹿らしい」(九ウ)

たれにかたみとむかしの人がぬひでおきたるゑぼし岩

廿三島田 二リ八丁

耳にかゝるはおまへの噂しま田くづしの髪よりも

けふは別れとおもひの外に雨でとまつた大井川」(拾才)

廿四金谷 一り

かたひ金谷の心をたより末のすえまでいひかわす

こがれこがれた今宵の逢瀬川のあいたる心もち」(拾才)

廿五日阪 一り廿四丁

日坂の山か石なら夜ばかりなれどひるもかわかぬ袖たもと

うまくころばす手くだとしれどくへばにくなひわらびもち」(十一才)

廿六掛川 一り廿九丁

一時もはやふ身まゝと神々様へねがひかけ川朝まいり

わるひはらだよだましておひてあとでわらふはおいけ町」(拾才)

袋井 二り十六丁

もろたきせうも大事二かけてかゞみ袋井しもてある

わしのまことはごんげんさまもみかのはしだよどこまでも」(十一才)

廿八見附 ？り半

つゝみかくすもいまゝでの事見付られたら百年め

うどんそばかようち？ゝかれて居てもそひたいぬしのそば

廿九浜松 四り八丁

わしの言ふ事浜松かぜとそらにふかしてにくらしい

うけたうたかゝるしのはら池であるてみたいなどこまでも」(十二才)

三十舞坂 二り半十二丁

蝶の舞ざかあらしほらしやいづれなたねによるわひな

深ひ中をばいまきれなどゝ親ま邪見のよこわたし

卅一新居 海上一り半」(十二才)

△一丁欠あり▽

すひたどうしは義理立して？ひとよ酒かやなれやすい

いやな御油どのゆだんはならぬいつもむほんのできどころ

よそにます花ありともまゝよすぐなみさほの竹の庄」(十四才)

卅六赤坂 十六丁

うわさしられてかほ赤坂にそれてせけんえさとらるゝ

わしは長はん牛若さんのよふなどのなら命でも

卅七 藤川 二り九丁

花のふぢ川わたしのこゝろもつれもつれてとけかぬる

義理できても」(十四才) なを行末はついにそつだの郷(さと)じゃまで

卅八岡崎 一り半七丁

うわきやめたら岡崎ざきをあんじすごしの苦の世界

いふははづかしいはねばしれずなんと矢はぎのはしはしら」(十五才)

卅九池鯉鮒 二り廿九丁

かぜに池鯉鮒くあの紅葉々もみづにせかれてゐるわひな

硯引よせしあんにくれてしばしかりやのうでまくら

四十鳴海 二り三十丁

よその咄もきづもつあしはあせに鳴海のひとしほり」(十五才)

なほもねがはん観音さまにかけねがひに笠かけて

四十一宮 一り半六丁

義理と世間のおもわくかひてくるふしとげた今を宮

あわぬかほしてすましてぬれどこかことばのさやまわり」(十六才)

四十二桑名 海上七丁

すきと桑名のよひ中どしはいつかふたりでかせぎ出す

桑名かあたよとけふこの頃は貝を焼ので履気よし」(十六才)

四十三四日市 三り五丁

ながくあわぬとゆびおり見ればたつた日かすも四日市

ふかひ中をば追分られてたよりまつまも日ながむら

四十四石薬師 二り廿七丁

里にそだちわたしじやけれどかたひ心の石やくし
むかし大将のさゝれたさくら今に花さく春もある」(十七才)

四十五庄野 二十七丁

せふのわるひときてはみれど世事でまよひの種になる

世話を焼ごめほうかみりんきほつてをかんせよその恋

四十六龜山 二丁

すゑのちぎりは此かめ山て」(十七才) ちとせすぎてもかはりやせぬ

人眼せき川やうやうこえてあいにおちはり村とまり

四十七関 一丁半

せきにせかれたふたりのなかも胸のしがらみいつをける

追分けられたる其うへにまだせきの地蔵さんが横にらみ」(十八才)

四十八坂の下 一丁半

さかの下から出てくどかれてつよひいきぢもどこへやら

いけんしかけりやわがよきよふによこに出かける蟹が坂

四十九土山 二丁半」(十八才)

顔にぬられた土山なれと心ひとつであるて見しよ

まは？かねたる筆すて山をすてゝしもふて口でいふ

五十水口 二丁半七丁

いやよおよしよみな口々にそんな世界じやないわいな

みづにまはり気よしてもおくれ夏見すゞしき心太(こゝろぶと)」(十九才)

五十一石部 三丁半三丁

こひしこひしは石部のしゆくよ恋の重荷といまはなる

親の目川をしのんできたにあひに田楽きがつよひ

五十二草津 二丁半十七丁

どつさくさつのなかももしばし」(十九才)

和漢書物類「品々」

△広告省略▽

「書物画舛紙」問屋

大阪北はり江市場 綿屋徳太郎版

心さいばし塩町角 綿屋喜兵衛版」(奥付)

本書は著者不明である。成立は嘉永頃と考えられる。今から157年以上前のものであり、著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。

三、『絵本どいつ惣まくり』(名古屋市蓬左文庫所蔵。図書番号、尾

19,155)

大阪大学小野文庫・国学院高藤田小林文庫にも同本を蔵する。大阪大学小

野文庫蔵本の保護表紙の見返しに次の如く墨書あり。「此書都々逸ノ起源ヲ

知ル珍本也嘉永二己酉年の出版とす」。これによって嘉永二年(1849)の

刊行としておく。

内容は多彩で、次の諸項目から成る。

索々老人の序文(どどいつの歴史)

東都名所

五節供

東海道五十三駅

十二ヶ月

正述心緒

寄物陳思

雑歌

雑体

新吉原八景

以上である。この中の「東海道五十三駅（つき）」を蓬左文庫本によって翻刻する。本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。許可書番号21教蓬第23号。ただし、十五丁が欠けているので、この部分は国学院高本等によって補った。

絵本どゝいつ惣まくり

東都諸名家戯作

蓬壺摘傳

索々老人閑（見返し）

東海道五十三駅（つき）

日本ばしやりはふれふれさていさましいてんきあがりのお江戸たち（四日市

鯛看板）

恋のみなとや品川（六ウ）あそび日に日におもひは増もとや（新ばし

音屋）

大森をこして今またさて大もりなめしのなだいは万年や（リヤウリ 卯之

助）（七オ）こひができたよかな川じゆくにのぼりつめたるたきのはし（九

返舎 一昇）

あしのぐあいもよい程ヶ谷とまはるかなぎはしようみやうじ（源氏 茶漬）

かまくらすましてはや江のしまよしやれてかはゆいかひづくし（両国 朱場

おしげ）（七ウ）

げびぎうといはゞいはんせあのさかひぎで「ぼたもち四五くふたうちおつ

れさんはさきへおたち」（きもとつかはと吉田はしすみゑのふでによるのふ

じ）みちは石だかはかどらず（馬喰丁 かりまめや）

あとにおくれしあしよわつれのくるましばしとゆぎやうでら（並木 清

瀬）（八オ）

心なき身はしぎたつさはもしらぬひきやくが大磯ぎ（秀ノ山）

小田原の外良（ういらう）つんだるそのくちよりもはやくまはるよわしが気

は（清元 菊寿太夫）（八ウ）

箱根七湯もめぐつてみたがこひのやまひにやきゝはせぬ（市川新車）

三嶋ごよみをみるよなふみはいづれひがらのたのみ状（よし原 竹村）（九

オ）

沼津

千はんのあれはまつばか文治のむかし（さるほどにこゝにまた高をのもんが

く上人は六代ごぜんのいのちこひ馬をとばせてひとはしり）ちやさへのまず

にかけてきた（牛島登山）原

けふもぬらくらまたながやすみまづいうなぎでかしばばら（荒馬）（九ウ）

おもひだしたよ吉原宿で丁のなじみのふじびたい（千住 鮎屋）

蒲原

たこのうらうちいでゝみればテモしるたへにじゆばんそろへてふじまあり

（新宿 辰近江）

由井

さつたたふげはよめりにやいむがゆきのしろむくふじの山（スチカヒ 仲川

屋）（十オ）

沖津女郎のあのしつこさに江戸の女がしてみたい（揚屋町 魚滝）

名さへきたない江尻のしゆくは馬のおならと牛のくそ（高縄 万清）（十

ウ）

府中

ぎりからまれ心のたけをやへにくんだる籠細工（辰巳大野や おりよ）

二丁町すぐに出てきて鞠子のしゆくでチヨイととろゝのはらなほし（中橋

環菊）（十一オ）

岡部

つたのほそみちなにくらからうこひのやまぢにくらべては(今戸 玉秋)
あづまやのしそのつけものこの藤枝のいろのゆかりのこむらさき(???)
八百栄(十一ウ)

嶋田
かはごしにすゑをかけたる嶋田のちよろおなじはちすのれんだいに(並木
田舎茶漬)

金谷
うまでもこされぬあの大井川神のおかこかやすくこし(宮戸川 おてつ)
(十二オ)

西坂
しげつたところがアリヤむけんざん(いかにならひぢやつとめぢやとてもい
やなきやくにもあはねばならぬ)金がほしさや三四百(重石)

みちはいのちも掛川なれどぬしはふたみちふたせ川(十二ウ)
袋井にいれたねすみはにがしてやんなころすもどうやらかはひばし(青山
福富)

見附
天龍川でもとめればとまるとゞめかねたるなみだ川(小柳)(十三オ)
遠州浜松

赤いよでくろいほねはすみぬりひめぢ紙(竹本 美代太夫)
鳶も舞坂てんきもしづか名のみあらゐのわたしぶね(猿若町 升八)(十三
ウ)

荒井
くものなみまにはまなのはしのあとはかすみのいちもんじ(山谷堀 浜栄)
さきはなんにも白須賀なれどかはゆいめもとのしほみざか(根岸 長次)

(十四オ)
よし田ぼくちもまだ一里半ちよつと一ふく火打坂(つる音)

吉田とほれば二かいからまねくしかもあの子のふりのよさ(松江)(十四
ウ)

こしをかけたまでいまたてました御油るされませすゞどほり(仲伊)
げにも赤坂あなかのぢよるもみんなけだしはひぢりめん(扇要)(十五オ)
これもゆかりの藤川なれどむかしをとこのさたはない(竹田くみ太夫)

岡崎女郎衆はよいかはしらずごようごようでおちつかぬ(ハシバ 川口)
(十五ウ)

知立
ときも八ツはしはるばるぎぬるつまらん古跡もよいころに(不二?)
鳴海

女にはいつも孝行養老しほりかつてなじみへとゞけさせ(三分亭)(十六
オ)

鯛やにとまつて子はするがやでよんでどゞいつ宮のしやれ(駐春亭)
七里ねむつてはやよこまくらゆめのまにつく桑名ぶね(つる 清六)(十六
ウ)

四日市やもひとりはずにひるもひながをのみくらし(小玉太夫)
よほどゐなかにまたなりましたかたいとうふの石薬師(品川 長門屋)(十
七オ)

庄野
しやうのないのはこゝらのしやくよむだもいはずにずいとほり(つる 勝
七)

あめにぬれぬれ亀山あたりどろに尾をひくやれわらぢ(竹梶太夫)(十七
ウ)

関のぢぎうのふんどしならで(でたらめ上るり)(いもがむすびしたひも
をかへる日までとはとくまいと万葉ぶりのばかりちぎ(ふるをいるときやアな
んとせう(鼠笑)(十八オ)

あけぼのゝはながかうばしめくらのこひぢみづにあふのか土山の（中村うた）

をたの水口つまよぶかはづかはいかはいとなきわたる（延小政）（十八ウ）

石部金吉をとこにもちなとてもあだではきがもめる（留場 菊松）

草津でも鯛といへどももうこのへんはせたのしゝみにあふみぶな（八百

善）（十九オ）

湖水（みづうみ）

びはの海よりこちやさみせんの川らぬねじめがいつもすき（紀伊国や 亀

洲）

大津絵のげはうあたまをあの大こくが「しんない」のぼりつめたる（十九

ウ）二かいのはしごおやにさからふこのみのうへ（アレサ七ふくじんにはお

やはない（油丁 すし甚）

たゞ今京都へ三条のはしながの都路さはりなく（三笑）（二十オ）

本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。許可書番号21

教蓬第23号。作者は不明であるが、嘉永二年（1849）の成立であり、今

から161年前のものであつて、著作権は消滅していると考えるのが常識的

判断である。

四、『膝寿里日記』（嘉永末年刊）

日本古典籍総合目録によれば、本書は、磨丸（歌川/国磨）画、嘉永末刊となっている。本書は複製本が数種出ている。菊池所有の複製本は次の4本である。

和紙を使ったもので、中本仕立て。発行元不明。

半紙本サイズだがげはげはしく着色したカラー印刷のもの。発行元不明。

江戸錦絵愛好会編著、コアラブックス発売、本の森出版センター発行。一九九七年十一月三十日発行。これには赤・茶・薄茶などの着色がある。B5判のカード形式で、綴じてない。「宿女（価）」の部分だけがほとんど活字印刷となっている。序文省略。

東大路鐸編集、画文堂発行。「季刊浮世絵別冊 浮世絵美術名品館 1」。昭和五十九年（一九八四年）十二月二十日発行。B5判で、見開きの左側に影印、右側に翻刻がある。

以下、これらによって、各宿の都々逸のみを抽出した。

品川

品川女郎をやつこがかつて鑓をふらずにしりをふる

川崎

つらのかはさきひんむかれても通りいつペン旅のはぢ

加奈川

富士のすそのへぬけ穴よりもお前のおあながをがみたい

程ヶ谷

ぬしの口前よいほどがやにわたしやころりと信濃ざか

戸塚

わたしや戸塚の大ぎんたまよ今さらお前にじやまがられ

藤沢

松のふじさは枝葉にからみ枯てのちまですがりつく

平塚

人はひらつかこよひの首尾をこんなうれしいことはない

大磯

こゝろなき身もしぎたつさはの秋のタぐれものさびし

小田原

小田原ひやうぎはもうやめさんせぬしの気やすめきゝあきた

箱根

箱根八里の kannan よりも恋のやまさか苦がおほい

三島

それとみしまにもう雲がくれゑゝもしんきな夜半の月

沼津

わたしや沼津のせんぼん松よかはらぬ操は千とせまで

原

はらのたつほど男根（へ）のこがたてばとうにじんきよをするだらう

吉原

吉原すゞめがちよつちよつときては籠の小とりをそゝなかつ

蒲原

酒のかんばら小ゆびの先をちよつとしめしてなめて見る

由井

ゆるもはいるし髪をもちふてぬしにあかれぬ身こしらへ

興津

駕籠はよけれど船路はよしな沖津しらなみたちやすい

江尻

三穂の松風琴しらぶればふじのたかねにひくかすみ

府中

恋をするがのふちうときけばいつちやうとぼそか二ちやうまち

鞠子

たとへまり子のつき出されてもえんのかゞりはぎれはせぬ

岡部

をかべにかすがへいふてもきかぬことゝ知りつゝまた口どく

藤枝

涯（がけ）のふぢえだぶらりとしてもやがてとりつくつるがある

島田

しまだ小供と小ばかにしたらとんど手くだにおほぬ川

金谷

銭やかなやでじゆうにならば恋じでくらうをするものか

日坂

日坂のわらび餅ほどぬらぬら出して砂糖ちんぼをくひたがる

掛川

思ひかけ川しづうはどうぞつまや女房といはれたい

袋井

恋のはつ花散さぬやうに風のふくろみくちをぬへ

見附

見つけの鳩ではわしやないけれどまめをたづねて遠あるき

浜松

もしやそれかとたちでゝ見れば風の浜松おとばかり

舞坂

うたへ舞ざかうきよはとかく酒と女にこめのめし

荒井

わたしや鼻息あらるのふねよぬしに帆はしらたてさせる

白須賀

人はしらすか今宵のしゆびをこんなうれしいことはない

二川

桃もほしいが桜もだいじこゝろ二川身はひとつ

吉田

よし田ならねど二階からまねくしかも連子のあひだから

御油

ごゆつくりとはうはべのおせじ鐘や鴉をまちかねる

赤阪

赤さかやつこといはるゝ身でも恋路にくらうはおなじこと

藤川

かほる藤川こひむらさきはたれにゆかりのいろをさく

岡崎

岡崎のしゆく矢矧のはしいたよりもぬしをまつ夜はなほながひ

池鯉鮒

雲か霞とみるまもあらし雪とちりふるさくらばな

鳴海

いろになるみといふつづうらかぬしの浴衣のこんしほり

宮

みやのあつたの海こぐ船よあけくれわかずにこがれぬる

桑名

私しや桑名のやきはまぐりよぬしにわられて水をだす

四日市

五十路あまりに三宿のたびもけふは都へ四ツかいち

石薬師

惚れて居るのになぜしてくれぬぬしは木像のいしやくし

莊野

しやつわるいとしりつゝほれるわたしやくらうがして見たさ

龜山

よろづ代をへる龜山よりもぬしのしらみがたのもしい

関

人目の関守ないものならば恋じでくらうをするものか

阪の下

さかはてる日もまた雨の夜も逢にやこゝろがやすまらぬ

土山

雨のつちやまあしもとよりもくちのすべりの気をつけな

水口

いろの恋のとみなくちくちにいふはやくのかそねむのか

石部

かたいいしべの木まくらよりもわたしやお前のひざまくら

草津

人のわきがをとやかういふがぼゝのくさつにやアましたらう

大津

長いたびぢのつきかなんもきみにあふつを楽しみに

京都

花のみやこのいろかをしたひあづま男のふたりづれ

島原

(どどいつナシ)

本書は著者不明である。成立は嘉永末年とされている。今から157年以上前のものであり、著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。複製本が多数出ている。

五、『東海道五十三次どどいつ』(菊池真一所蔵)

安政三年(1856)刊か。一筆菴英寿画篇。上田市立図書館花月文庫に『五十三次都々逸節用集』(音楽/381/花月文庫)なる本があるが、こ

の中の五十三次の部分は菊池本と同じものである。ただし、表紙は後補。また、名古屋市蓬左文庫蔵『どゝ一合本』（尾19-156）の中の五十三次の部分も菊池本と同じものである。更に、菊池は無表紙十丁の東海道都々逸本（外題なし）を所有しているが、これは本書と同じものである。

以下、菊池本の翻刻。振り仮名は一部を除いて省略。

東海道五十三次どゝいつ

外題国政画」（表紙）

東かい道五十三次どゝ逸」（見返し）

都登いつは滑稽詩（しやれることば）の花の旅つかれし歌も五十三次

一筆菴英寿画讃」（一才）

日本橋

唐も天ぢくもおよばぬはんぜうひかりかゝやくにほんばし

品川

江戸をはなれてまたしなかはる恋のみなどの舟にのる」（一ウ）

川さき

ぬしのかほみりやとつかはさきへなにからいをやらあとやさき

加な川

ふみのかな川うれしひたよりこひのみちゆきいろのたび」（二オ）

程がや

ぬしのくちまへよいほどがやにわたしやころりとしなのざか

戸つか

とつかまへてもくどひて見たひあだなえがほの茶や女

ふじ沢

杉のふじさはえだはをからみいろもゆかりにすがりつく

平つか

ほどのよひのを見せひらつかしこなうれしひ中はなひ」（二ウ）

大いそ

大いそのとらのいちねん石までにけるかたひやくそくかはりやせぬ

小田原

おだはらひやうぎはもふやめさんせぬしのきやすめきゝあきた

箱根

はこね八里のかんなんよりも恋の山ぢにくろうする」（三オ）

三島

それとみしまにはや月のかほゑゝもしんきなくもぐくれ

沼津

のまずくはずにいとともまゝよぬしとそふならいとやせぬ」（三ウ）

原

はらとなにやらいつしよにたちてねるもねられぬとこのばん

よし原

よしはらすゝめかちよつちよつときてはかごのとりおぼそゝなかつ

かん原

さけのかんばらふうふの中をあたゝまる手をたのしみに」（四オ）

由井

ゆいもはいるしかみさへゆふてぬしに見せたひ身ごしらへ

おきつ

人に心をおきつのうみよふかひ思ひをさつしやんせ

江尻

ゑじりふごじりわるくはいへどいかな女もたゞはいぬ

ふちう

ふちう不孝もみな恋ゆへにせうちしながらうつかうかと」（四ウ）

まりこ

ぬしのむりにはまりこといへどじつはうれしひさかさまに

岡部

おかべおかめにやらくにも見へるわたしやまめゆへ身をくだく

藤枝

いろのふぢえだぶらりとしてもどふかとりつくつるがある」(五才)

島田

はなのさかりのしまたのときはおにも十八じやもはたち

金谷

銭やかなやでじゆうにならばいろにくるうをするものか」(五ウ)

日さか

につさかのわらびもちこむほどよくちにひとつころりとしてやられ

掛川

思ひかけ川しじらはぬしのつまよにやうぼといはれたい

ふくる井

こいのはつはなちらさぬやうに風のふくるひくちをぬへ」(六才)

見付

見つけられよかとかくふみさへもしのふもぢすりみだれふで

はま松

もしやぬしかとたち出てみればはまのまつかぜおとばかり

まい坂

うたへまいさかつきよはとかくさけといるとにほかはなひ

あらぬ

あらひ上たるふたりの心なにをとがめるせきはなひ」(六ウ)

しらすか

むしがしらすかこよひのしゆびをこんなうれしひことはなひ

ふた川

もゝとさくらにどちらへゆかふこゝろふた川身はひとつ

吉田

ほどもよし田のしまだのすがたしかもかのこのふりそでに」(七才)

ごゆ

ごゆつくりとはうはべのお世事まぶにあふのにやしやまになる

赤坂

あかさかやつこといはるゝ身でもこいぢにくるうはおなじこと」(七ウ)

ふぢ川

はなのふぢ川こひむらさきはたれをゆかりのいろにさく

岡崎

おかざきにかけたゆはだのはしいたよりもぬしをまつ夜はなをながひ

ちりふ

ぬしのうはきで心のちりふこいのふちにやしづむ身を」(八才)

なるみ

いろになるみといふつじうらかそめるゆかたのあいしほり

宮

あれみやしやんせと人にはいはれだますあなとは気がつかぬ

くわな

わたしやくはなのやきはまぐりよぬしにこがれてやきもする

四日市

いきな心につひひかされてけふもいつゝけ四日いち」(八ウ)

石薬師

ほれているのをよくしりながらぬしは木ぞうかいしやくし

庄野

しやうのわるひとしりつゝほれるわたしやくるうがして見たい」(九才)

かめ山

つるとかめやまおまへとわたしにせもさんせもすへながく

せき

人めのせきもりないものならば恋ぢにくろうのありはせぬ

坂の下

さかのてる日もまた雨の夜もあはにや心がやすまらぬ

つち山

金をつち山はなまきちらしこいのふちおばうめたがる」(九ウ)

水口

いろのこいのとみなくちぐちにいふはやくのかそねむのか

いしべ

かたひやくそくいしべのしゆくでかいすまくらもいのちづく

草津

あきのくさつにいまはなざかり人のこゝろもいろいろに」(十オ)

大津

ながひたびぢのうきかんなんもぬしに大津をたのしみに

京都

花のみやこへけふのぼりきてつきぬなかめをたのしみに

五十三次の長旅もまつ京都へどいつさんにかけ付めでたしめでたし

一筆菴英寿画篇」(十ウ)

菊池本はこの後にいるは都々逸十丁がある。その序文に「安政三辰春新刻

一筆菴英寿誌」とある。上田市立図書館本は、最初にいるは都々逸十丁、

次に源氏都々逸十丁、その次にさく丸撰の都々逸十丁、次に東海道五十三次
都々逸十丁、最後にいるは都々逸六丁となっている。

著者一筆菴英寿の生没年は不明だが、安政三年(1856)の刊行と推定
され、154年前のものであるので、著作権は消滅していると考えるのが常
識的判断である。

六、『度独逸大成後集之後冊』(東京都立中央図書館蔵特別文庫東京誌料。図
書番号は東/5644/132)

内題「度独逸大成後集之後冊」、尾題「度独逸大成文句入後編」である。

この本の末尾の「前編遺漏」の最後に「東海道五十三駅」として宿駅詠込
都々逸が掲げられている。安政六年(1859)の序文がある。『度独逸大
成』の編者、歌沢能六斎は、文政九年(1826)生れ、明治十九年(1886)
没であるから、著作権は消滅している。

以下、東京都立中央図書館蔵特別文庫東京誌料本による翻刻。この翻刻に
ついては、東京都立中央図書館(館長・松田芳和)の許可を得た。

東海道五十三駅(つぎ)

日本はし鏝はふれふれさていさましてんきあがりのお江戸だち

恋のみなとや品川あそび日々におもひはますもと屋

大森をこして今またさて大もりなめしのながいに万年屋

こひかてきたよかな川宿にのぼりつめたるたきのはし」(三十五ウ)

足のぐあいもよい程がやとまはる金沢しようめうし

かまくらすましてはやゑの嶋よしやれてかはゆひ貝づくし

けびぞうといはゞいはんせあのさかひ木て「詞」(ぼたもち四五くふたう

ちおつれさんはさきへおたち)「上るり」(きもとつかはとよし田じゝすゑの

ふでによるのふじ)みちは石だかはかどらす

あとにおくれし足よはつれのくるましばしと遊行寺

朝はこさむい花みつ橋でくさめ三ツ四ツ七ツたち

こゝろなき身は鴨立沢に」(三十六オ)しらぬ飛脚が大磯ぎ

小田原の外良(ういらう)くゝんだその口よりもはやくまはるよわしが気は

箱根七湯にまはつてみたが恋の病にやきゝはせぬ

三嶋ごよみを見るような文はいづれ日からのたのみ状

千本のあれは松原この治(ち)のむかし(さるほどにこゝにまたたかをも
んがく上人は六代ごぜんのいのちごひ馬をとばせてひとはしり)茶さへのま
ずにかけて来た(三十六ウ)

けふもぬらくら又ながやすみまつはうなぎでかしはばら

思ひだしたよし原宿でてうのなじみのふじびたる

田子の浦うち出でみればテモしろたへにじゆよばんそろへてふじまうで

さつたたふげは嫁りにやいむがゆきのしろむくふじの山

興津女郎のあのしつこさに江戸の女をしてみたい

名さへきたない江尻の宿は馬のおならとうしのくそ

ぎりからまん心の竹をやへにくんだるかございく(三十七オ)

一丁町すぐに出てきてまりこの宿でちよいととろゝで腹直し

鳶のほそ道なにくらかるふ恋のやみぢにくらへては

あつま屋のしそのつけもの此藤枝のいろのゆかりの小紫

川こしにすへをかけたる嶋田の女郎おなじはちすのれんだいに

馬でもこされぬあの大井川神のようこかやすくこし

しげつた所がアリヤむけん山(いかにならひじらうとめ)(三十七ウ)じや

とてもいやな客にもあはねばならぬ(金がほしさや三四百

わちは命もかけ川なれどぬしはふたみちふたせ川

袋井にいった鼠はにがしてやんな殺すもどふやらかわいばし

天龍川でもとめればとまるとゞめかねたるなみだ川

遠州はま松赤いようでくろいほねはすみぬりひめぢうみ

鳶は舞坂てんきもしづか名のみあらゐのわたし舟(三十八オ)

雲のなみまにはまなの橋のあとはかすみの一文字

さきはなんにもしらすかなれどかはゆひめもとのしほみ坂

よし田ぼくちもまた一里半ちよつと一ぷく火打坂

よし田とほれば二階からまねぐしかもあのこのふりのよさ

腰をかけまで今たてました御油るされませすゞ通

げにも赤坂いなかの女郎みんなけだしはひぢりめん

これもゆかりの藤川なれどむかしの男のさたはこい

岡崎女郎衆はよいかはしらす(三十八ウ)

ときも八ツはしはるばるきぬるつまらん古跡もよいころに

女にはいつもかうかう養老しぼり買てなじみへとゞけさせ

鯛屋にとまつて子はするかやでよんでどゞいつ宮のしやれ

七里ねむつてはや横まくら夢の間につく桑名ふね

四日市しやもひとりはねすにひるもひなかをのみくらし

よほどいなかになりましたかたい豆腐の名薬し

庄のないのはこゝらの宿よむだもいはずにずいとねり(三十九オ)

?ぬれぬれ龜山あたり泥にも尾をひくやれわらし

関の地蔵のふんとしならば(てたらめ上るり)(いもがむすびししたひもを

かへる日迄はとくまいと万葉ぶりのばかりちぎ)ふるにゐるときアなんとせ

う

あけぼのゝはながかうばしめくらのこひじ水にあふのかつちやまの

をたの水口つまよぶかはづかはひかはひとなきわたる

石部金吉おとこにもちなとてもあたではきがもめる

草津ても鯛といへとも(三十九ウ)もう此へんはせたのしゞみにあふみぶ

な

ひはの海よりこちやさみせんのからぬねしめかいつもすき

大津絵のげぼうあたまをあの大こくが(新内)のぼりつめたる二かいは

しごおやにさがるふこのみのうへ)アレサ七福神には親はない

たゞ今京都へ三条の橋ながのみやこぢさはりなく(四十オ)

歌沢能六齋は、文政九年(1826)生れ、明治十九年(1886)没であるか

ら、著作権は消滅している。東京都立中央図書館蔵特別文庫東京誌料本の翻刻については、同館（館長・松田芳和）の許可を得た。

七、『東海道五十三次気さんじ都々一』（名古屋市蓬左文庫。図書番号、尾19-130）

蓬左文庫蔵本は二巻二冊であるが、菊池蔵本はその前半に相当するもの、表紙欠で本文は嶋田まで、途中一丁欠がある。弘前市立図書館蔵本は後半に相当するもの、虫損が目立つ。

序者の白山人は吾妻雄兔子こと梅亭金鷲であり、文政四年（1821）生れ、没年は明治二十六年（1893）である。本書の成立は、「東京日本橋」中の記述から、明治元年（1868）十一月から明治四年（1871）七月の間と推定される。

以下、蓬左文庫本の翻刻。本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。許可書番号21教蓬第23号。振り仮名は特別なものを除き省略。東海道五十三次気さんじ都々一（表紙）

（絵）馬喰三よし小はん（見返し）

序
十返舎の大人。膝栗毛を引出して。弥次郎兵衛喜多八をして是に乗らしめ。東海道より登したれど。此両子をして都々逸を唄はせざるを以て実に金玉の一瑕と為すとぞ。故に今彼の弥次喜の両人が。宿々或るは名所旧跡にて詠じたる。与之古塾の文句を集め。前後二帙の小（一才）冊と為し。一九翁が失念の穴を塞がんとす元来御苦勞無の二子等が。駅路（うまやぢ）の開放題看るもの聞ものを鼻唄に唄ひなしたるものなれば。題して気散じ都々逸とい

ふ。是また一種の道中記ならむかし

白山人述（一ウ）

東京日本橋 しがはへ二里

きやう橋よりかみてのかたにあたりいふぢよやできるいろごとをしんしまばらといふこれぞ恋ぢのふりだしなるべし

恋をするのが富士さへみえていろの振出し日本ばし（二才）

品川 かはさきへ二里はん

いぎりす人しながはを見て一分三朱のうみなりといふなぜといつたらおだいばが七ツ見ゆるとこたへしとぞ

しな川女郎衆の意気地は客をふつて音（ね）の出る鈴が森（二ウ）

大森 あひのしゆく名ぶつかうのもの

このところのかごやしきりにかこをすゝむるゆゑはてなと思つてうみのなかをみたらそのはづのことのりそた

忍びおほもり口説のたびにこひの手くだへ海苔が来る（三才）

川崎 かながはへ二里はん

かみてのかた半道にして大しかはらあり六ごうの川はそう名玉川なれどなむ大しへんじやう五合といふより一合ふやして六がふなづけしとぞ

面（つら）のかはさきひんむくならば大師かわらのかけがよい（三ウ）

鶴見 あひのしゆく名ぶつ梨子（なし）

つるみといへるより水たくさんなるなしをめいぶつとすればかこひなしはうまみすくなしとかくぬすみなしこそみつけおほくしてうまみありといふ空につるみの蜻蛉が入ればいる気梨子（なし）さへ水をもつ（四才）

神奈川 ほどがやへ一里九丁

めいぶつのかめのこうせんべいはこうらをあつくしてむしやうにはいかけるといふのをしへのよしなればたびのはぢはかきてこそそのちのはなしのたねともなる

ふみのかな川かく文字りも便りよするならてれがらふ」(四ウ)

横浜 みやのかしよりふねにて廿丁

このところはべつせかいにしてちかごろいこくよりもぢようる来りにつほん人これをかいこく人は日本の女をかいわかんいれごみのまはしきやくじつにおもしろくるんぼうもありとぞ

わしが思ひは本牧なれどぬしはよこはますねことば」(五オ)

保土ヶ谷 とつかまで二り九丁

かなざはへの道ありよこはまひらけてよりこのところのいふ女はんじやうするによりけんしきはふじの人あなとともにたかしゆゑにしゆくのならのほどがやにてころりとさすべし

ぬしのきりやうがよい程が谷にわたしや苦勞をしなの坂」(五ウ)

戸塚 ふぢさはへり三十丁

かまくらへゆく道ありこのところにむかし大ぎんたまありしがちかごろまたたやむらといふところにいろいろのぞうもつあるあなできたりまはりてみるべし

とつかまへたらもふ何処(とこ)までもはなしやせぬぞへ風の糸」(六オ)

鎌倉 とつかより五十丁

あましやうぐんのぢぶんさねともこつひこつきたまひしところにして毛はへざるなめりがはいゝがはまなぞのめいしやうあり

うはきよ刈る様なはがねがあらばわたしやゆきたや鎌くらへ」(六ウ)

藤沢 ひらつかへ三里はん

ゆぎやう寺は一へんしやう人のかいきなりむさしほぶんけいも一へん上人なるよしなれどそれにはあらず小栗堂ありぢぞうそんはとるてのひめのまもりほんぞんなりといふ

深いひかりのいろ濃いまつへからむ藤さは千代までも」(七オ)

榎の嶋 ふぢさはより五十丁

べんざいてんをあなにまつるは女がみなればなるべしさればこのしまにまつだけはゆることなくかひあはせをするをもつてあそびとするよしいへり

ふかい思ひはあの江のしまの岩屋の穴にもまけはせぬ」(七ウ)

平塚 大いそへ廿七丁

なりひらのあそんこのところをとほりしにさむさつよくしてはなみづをたらしたまふゆゑに花水橋ありそのはな水のあと十間ほどにひきたればとて十間坂といふもある也

膳のひらつか長薯などゝすてゝ置れぬ味がある」(八オ)

大山 よつ谷よりわかれて北へ入る

六七月のころはうつくしき女たくさんなるゆへさんけいの男みな大てんくにてだいなつこのくるしみをうくる也らうべんのたきなどあびてはなをちゞますべし

ぬしにあふ山その夜は路次のしまる四ツ谷が気にかゝる」(八ウ)

大磯 をだはらへ四里

しぎたつさはありしぎたつさはのしへにこりをうてばじきたつさはなりじきたつさはゝ大いそぎのしゆくにあればなるべしとうこいししゆくのならどこにあり

べに筆なめてはわるがみへかくふみの便りの大いそぎ」(九オ)

小田原 はこねへ四里八丁

をとこもつめぼしのごとくしなればをだはらちやうちんのごとくなるべしゆゑにこのところのめいぶつはうめぼしを第一となしういらふしほからなどもあるなり

をだはらひやう議の月日もいつかたてば早いぞ二十七」(九ウ)

湯元 小田原より一里

はこね山のおんせんはよくすみて風呂のそのこみまで見ゆる也むかしゆげのだうきやうこゝにたうぢせしときゆのなかにてどうきやうまたの毛をか

ぞへしに三万三千三百三十三本ありしとぞ

木賀や湯元の七湯もなんの恋のまひにきくものか」(十才)

箱根 三嶋へ三里廿八丁

御関しよ今はなしゆゑに女のわうらいじゆうなればみづつみのふちにさいのかはらあれどもこゝへゆくものなしされどふた子のいましめあればうきはつゝしむべし

はこね八里は馬でも越すがねやのしきゐがこしにくひ」(十ウ)

三嶋 沼津へ一里半

みやうじんのみたらしにうなぎおほきはこのうなぎのこつくつかまへどこもなくぬらくらとしてはならぬとおんいましめなるよしいへり

それとみしまにもふ雲がくれぬしは月夜の子規(ほととぎす)」(十一才)

沼津 原へ一里半

きせ川といふ村にいふ女龜づるのつかありかめづるがもとへかよふ男まい夜千人にすぐゆゑにぬまづに千本まつたけあり今あやまりて千ぼんまつばらといふ

あめの沼津の水かさましてあやめまこもが見わからぬ」(十一ウ)

原 吉原へ三里六丁

人丸も田子のうらのけしきを見てうきしまがはらのうかれいだし名ぶつひごずいきにふじの人あなをねらひしまことによい毛ひきのところなり

こゝ原まぎれにすてばちよいへば笑顔つくらふふじびたへ」(十二才)

吉原 かん原へ二里三十丁

このところにむかしかくやひめといへる美人ありしが天てうへめさるれどもあがらずふしぎのほられぐすりをのこしててんじやうなせしとぞ

よし原すゞめのいけさうぞしい怨みよきくよな耳はない」(十二ウ)

蒲原 由井へ一里

吹上のはまにじやうりひめのつかありこのところをとほる人きさんじ

ど〜をひとつづつうたいこのはかに手むくべしとなり

あついぬるいの好みがあつて酒のかん原むづかしい」(十三才)

富士山 上り十里

ふじ山のごときはいぎりすふらんすあめりかにもなしとていこくの人も大いにこれをあいすまことにおふじさんのゆきのはだにはさいぎやうのこしをぬかせしもむべならずや

つもるおもひは三国一のふじのみ山は雪のたけ」(十三ウ)

岩淵 あひの宿名ぶつくりの子もち

ふど川にたつ水鳥の羽おとにおどるきへいけのさむらいにげたりといひしが今はなりざしきのおぢやれのもたつきにこしをぬかすたび人もまゝありとぞ

かたいお前の岩ぶちでさへ栗のこもちにやがてなる」(十四才)

由井 おきつへ二里十二丁

このところしほがまおほきゆゑしほをやく小屋のうちをやどりてしほくみの女をころばせばこの女千鳥のなきごゑをいだすといへり

かゆいところへ手をとゝかせてまことつくすになにふそく」(十四ウ)

薩陀峠 本名いわき山

このところあはびのめいしよにしてすひつくがごときのけいしよくありされどかたおもひはにをかつく人足のみにてそれさへ今は山の下なみうちぎはをとほればくるしみすくなしとぞ

いたくない様にぶつくらさはでさつた峠といふはうそ」(十五才)

興津 江じりへ一里三丁

みのぶ山人の道ありこれへさんけいすれば女のほれることめうほうれんげきやうとごんごんなこちびてもかなはぬといふことなしとぞ

寝つおきつまでとお前はおとさたなくてそばやあんまやか」(十五

ウ)

江尻 しづ岡へ二里廿七丁

くのう山へまはりてしづをかへいづべしきよみがたせいけんじなどありて
たうかい道ぶそうのふうけい也こゝにてこのどゝ一をうたひあまをとめに
おもひつかるべし

じやうだんまぎれのつひ手がさはり江尻つめツてしかられる」(十六才)
清水湊 かい道よりすこし海てのかたへ入る

はごろものまつはみほにありはくりやうといふれうしこゝにてはごろもを
ひろひてん人をくどきてつまとなしたるところなれば松のえだをよく見るべ
し今もはごろものわすれものなきにしもあらずとなり

しみづみなどの帆ばしらよりもみ穂の松たけなほふとい」(十六ウ)
静岡 まりこへ一里半

をごろまですんふといひしところなり二丁まちとて東京のよし原のほんも
とあり手ごしのさとよりせんじゆのまへまたそがの五郎のあいかたせうせう
などいへるいろ女のいでしところとぞ

あたりしづ岡更行まどにかこの松むしなきほそる」(十七才)

丸子 岡へ二里

めいぶつのとろゝは第一のじんやくなればこれをしよくしてこそつゞけさ
まに十だんごもうつ山のなるべけれ

おもはぬ袂もひく気になるははづむまりこの手のかげん」(十七ウ)

阿部川 かちわたし

川ごしのものとかく女をかたぐるまにてわたしたる也されどみをのびや
かにしてかつぐものゝきんたまのごとくちゞみてゐることなかれとなり
わたしやお前にあべ川もちでべたりくたりとつきまとふ」(十八才)

岡部 藤えだへ一里廿九丁

おかべとはとうふのことをいふとうふはかどぼつてゐてもやはらかし人も
かどはつたものだけ女にかゝるとやはらかななれば岡べはちもくうはべから

はわからぬといふことをとこの名にせともとぞ

からまりつひても岡部の岩はつたにみむきもせぬふぜい」(十八ウ)
藤枝 嶋田へ二里八丁

このしゆくの女りよ人からまりまつはりてはなれざることまつのえだに
ふぢのからみしがごとくなればふぢえだとなづけたるにて天室二年にできた
るしんしゆく也

みてはよけれどゆかりのいろの花の藤えださめやすい」(十九才)

嶋田 金谷へ一里

大る川はかいだうだいゝちのかちわたりなりたとへしま田の女にこの川の
ごとくくびつきりはまつてもむえきな金谷をつかふなといふいましめにこの
名をつけたりとぞ

あだなしまだにわしやほれこんで首ツただよ大井川」(十九ウ)

東海道五十三次きさんじ都々逸」(表紙)

(絵)馬喰三よし小はん」(見返し)

序

箱根八里は初編のうちに。既にして越たれど嶋田の駅でぎつちりと。筆の止
つた大井川を。今復(また)渡して金谷より。こじ付る気散じ都々一。旅は
憂とは誰が云た。野暮な口にも唄ひよい。口調へ一寸宿の名を入れ。里数は
勿論相の村。名勝名物旧跡まで大凡は書加へたれば。縄手の道な松並の。長
きに」(一才)倦(あき)の来ぬのみか。旅店へ着ても宿女(よね)達を。

浮し句文(もんく)の道中記は。東海道と恋路との。二たみち懸てゑいやツ
と。上りと成りしこゝの人や。彼処の図どりの鈍きも亦。お笑ひ草の種瓢箪
と。共にお腰に付させ給へば。是また旅中の調法ならん歟

白山人述」(一ウ)

金谷 につさかへ一里廿九丁

あはがたけにむけんのかねありてこれをつくときはきんぎんじざいにでき

るといへども男は女にほれられず女は男にほれられなくなるゆゑにきんぎんにはかへられずといへり

川が明ても泊つて居るよ銭や金谷のあるうちは」(二オ)

日坂 かけがはへ一里廿九丁

さよのなかな山のよなき石ならひよなきをする女しゆくのうちさまありゆゑにわらびもちのぬらくらをめいぶつとするなりとぞ

ぬしうはきに能につさかでこのこもぬらくらわらび餅」(二ウ)

掛川 ふくるゐへ二里十二丁

このところの女みなくず布(ふ)をおりてめいぶつとすれともくすにはあらずみなめい婦なりちなみて知るべし

ねがひかけ川まだ間もないにぬしはそろそろあきはみち」(三オ)

袋井 見附へ一里半

うつべ村の花むしろはふたりねにしてをらせてよしとしまくらのあたるところをおとせぬやうにやはらかにおらすべし

風のふくるゐふくれた顔へはやすりんきの角(つ)のとげ」(三ウ)

見附 はままつへ四里八丁

池田の里にゆやといへる美人ありてむねもりのちやうあいをうけたりそれゆゑか今もつてよい女をおりおりは見つけのしゆくの名ありとぞ

みつげられたらもう百年め戸だなさがしのつまみぐひ」(四オ)

浜松 まひ坂へ二里三十丁

このところひろいやうでせまければうはきをするとおきにされる也ましてたびのはぢはかきすてにいかずひく馬のうまにてちうしんするがごとくくにもとへしれることふしぎ也

風のはままつ夜すがら寝ずにさはくはずだよすねたふり」(四ウ)

舞坂 あらぬへふなわたしにて海上一里

このところしんぞのあるふねへのるを上とししまのあるふねへのるを中

とし大どしまのあるふねへのるを下とさだむとかくのりあひの女によりてふねのきつきようをしるとなり

足のふみどこ手のまひさかもわすれてお前に逆上(のぼせ)しやう」(五オ)

荒井 しらすかへ一里廿六丁

このところ女をとほさゞりしが御せきしよおんはいしとなりてよりよき女のわうらいすることおびたゞしくまことに今ぎりよりうしほのおしくるがごとしとぞ

鼻風のあらぬふべは寝どこの海になみをうたせる夜着のすそ」(五ウ)

白須賀 ふた川へ一里半

このところの女へやういに手をだすことなかれしほみ坂のしほあひをみさだめてよし女谷といふところありよりもきやうのちようあいの女こゝにゐたりとぞ

窓のしやうじにまたるゝ人の来るをしらすかとりのかげ」(六オ)

二川 よしだへ一里半

いはやのくわんのんをねんずればさるがばんばもとしまもしんぞもほれぬといふことなしといふ

灸のふたがはひきむしられていたお前のあてこすり」(六ウ)

吉田 ごゆまで二里半

せきの小まんのはかありめいぶつのほくちはうはきをたきつけるにはあらざるなりまた二かいからまねかれてもやういにゆくことなかれと也よし田とほれば二階はおるかまねく尾花の野にもある」(七オ)

豊川 よしだよりまはればごゆへいづる

とよかはいなりへさんけいしてけんぞくのきつねにたのみうはきをばかしてかたぎにしたらふべしまた人をきらひおのれにのみほれるやうにもたむべし

御ぐわんかけ根のとよ川さまへぬしのはきのなほるやう」(七ウ)
御油 赤さかへ十六丁

うしくほに山本かん助のせせきあれども人々みなしゆくのおじやれにこゝ
ろうかかれてたづぬるものすくなし

御ゆだんめさるななぞとはうそよお前からしてふたごゝる」(八オ)

赤坂 ふぢかはへ二里九丁

このしゆくもいふぢよのめいぶつ也ほふぞじのなはゝうはきをしばりてお
くによしとぞ

顔はてらてらあかさかやつこひとくらのつたる濁酒(しろつま)へ」(八

ウ)

藤川 をかざきへ一里はん

このしゆくのかたはらにこるもといふところありこのこるもおかさきの
女にやはぎとらるゝといふことはりとぞ

うはきなふぢかは手を出しかけてそつちこつちへはいまはず」(九オ)

岡崎 ちりふへ三里三十丁

むかしうしわか丸じやうるひめにもたつきしあとをひきて今もたびの人
このところのいふぢよにもたつくゆゑにいふぢよをめいぶつとす

岡ざきのやどのあねへにわしやうちこんで一まい着ものをやはぎ川」(九
ウ)

千鯉鮒 なるみへ二里三十丁

このところのざとうのぼういかにもしるものゝ大きかりしゆゑ馬市となづ
けたりしがいつしかうまをあきなふ市のたつところとなりしもおかし

山寺のかねのひゞきにさびしき増して花もちりふの里の夕」(十オ)

桶狭間 今がよしもとうちじにのば

このところの女はあめなどふるひ人なきをりをうかゞひきふにおこりてく
とくがよしのぶながのよしもとをうちたるもこのしほぶをもつて也

わたしやお前にぬけがけされて籬のはづれた桶はざま」(十ウ)
鳴海 みやへ一里はん

むかしはこのところよりみやへはまつたひにてゆきしゆゑ女いろくろかり
しが今はまをとほらぬゆゑいろしくしてよい女もありまつのしほりをめ
いぶつとする也

ちよつと見かけは美しけれどなるみしほりて丈(じやう)がない」(十一
オ)

宮 くはなへ海上七里

このところはかいだつぶそうのいふぢよにしてきやく人みなあつぼうのあ
つたとなるなりなごや人まちつゞき五十丁あり

豆をねらふとお前はいふがわたしやあつたのみやのはと」(十一ウ)

佐屋 川ふねへ三里のりてくはなへいづる

によつぼうのことをさやといへるなればこのところへまはるべしおまつり
はつしまのごつてんわうにてわたすなり

うみはあぶないまはりであるとかごでとばせなさやのみち」(十二オ)

桑名 四日いちへ三里八丁

ひがしとみたおかふけのりやうしよはやきはまぐりのめいぶつにして弥次
郎へゑはまぐりをまたぐらへおとしきんたまをやきたるところのきうせきな
り

わたしやくはなのやきはまぐりでぬしにわらせて喰せたい」(十二ウ)

四日市 いしやくしへ二里廿七丁

このところの女あげてあそぶべしもつともかたはらにみえ川あればがじや
れはすることなかれとぞ

四日いち夜のたひゞとでさへ惚りやわかれがつらくなる」(十三オ)

石薬師 しゃうのへ廿七丁

しゆくのなかにまりがはらといふところあればこゝにてはずいぶんはつみ

てあそぶべしとぞ

裂てもさかれぬふたりがなかはかたいちかひのいしやくし」(十三ウ)

庄野 かめやまへ二里

さゝきの四郎がのりたるいけづきといひしうまのいでたるところなりゆゑにいけづきならばやきもちやくべしとて名ぶつをやきこめとするとぞ

すゑをあんじてふさいて居れば苦勞しやうのと人がいふ」(十四オ)

龜山 せきへ一里はん

かめやまのかめといふより石川ここの御もちじるとなりたるよしりよ人もこのところにこうらほしてあそぶべし

池のかめやまよろつ代までも生てお前にそひとげる」(十四ウ)

関 さかのしたへ一里はん

このところは火なはのめいぶつなればいろ女などにたきつけられぬやうにやうじんすべしほそくながくやかれてはたれしもこまるものとぞ

たとへ人目のせきしよがあるがわたしや恋路のまはりみち」(十五オ)

坂の下 つちやまへ二里はん

かこのほふげんこのところのけしきをゑがき女のもとへおくらんとせしにけしきあまりてふでのたてどころをしらずゆゑにふですて山といふ

ぬしは高根のさくらのなでわたしや見て居る坂の下」(十五ウ)

土山 みなくちへ二里はん十丁

めいぶつのさしぐしはもとめて女のみやげにするによけれど茶はちやにするなどのつじうらありころをもちいて買ふべし

雨のつちやますべつてさへもぬしは氣強くころびやせぬ」(十六オ)

水口 いしへまで三里十二丁

めいぶつのかぶりがさをもとむべしぎりわるき女のまへをすどほりするときかたむけてゆくによし

よるときはるとみなくちぐちにぬしをすいたといふうはき」(十六ウ)

石部 くさつへ二里半七丁

長右衛門おはんがねぞうのわるきをみてきをわるくせしところなれば今もをりをりをわるくするやうなることおほしつゝむべし

いしへ金吉とはおもてむき誰しも惚ればのろくなる」(十七オ)

草津 大津へ三里半余

うばがもちよくねれたれどしゆくのならくさつにはあらずきそかいどうへのおひわけあり

風にふきしくさつのやうに世界のをんながなびきやよい」(十七ウ)

矢橋 ふなわたし大つへ一里

のりあひはとかく女のあるふねをめぐべしせんどうのさをのつゝはりよければおほつの坂もとへざんじにちやくするとぞ

いそぐころはやばしの船よどうぞ追風(おひて)をふかせたい」(十八オ)

膳所 あふみ八けいのうちのうけしよ

めいぶつのげん五郎ふなはじんやくの第一といふことうそにはあらず本だ侯のおんしろ也

名にしあふみの八景さへもぜゝがあるので人がすく」(十八ウ)

大津 さいきやうへ三里

このところはなにごとむかふみつみのふちなれば女とみたらばさんばしへつくふねのごとくあたりてためすべしあはつといふなはおもてむきばかりとぞ

今宵あふつといふやくそくにおちる日をまつ西の京」(十九オ)

西京(きやうと) めいしやうきうせきおほしたづぬべし

みやこはにつほんずい一の女のよきところにてものしやさしくばんじしとやかなりをとこのとりあつかいはだざはりのこまやかなるはじつによ

くにるいなしとぞ

鴨川のみづでさらしたわたしのむねは心のそままですきとほる」(十九ウ)

本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。許可書番号21
教蓬第23号。本書の著者の白山人は吾妻雄兔子こと梅亭金鷲であり、明治
二十六年(1893)である。著作権は消滅している。

八、『木曾海道六十九次気さむじ都々逸』(関西大学図書館所蔵。図書番号
HG11.91/A1/1)

序文・柱・内容からして、本書は第二編である。初編の所在は不明。菊池
も同じものを所蔵するが、一丁欠がある。

見返しに「吾妻雄兔子作ノ鷲亭系かく」とある。序者の白山人は吾妻雄兔
子こと梅亭金鷲であり、文政四年(1821)生れ、没年は明治二十六年
(1893)である。本書の成立年代は不明だが、『東海道五十三次気さん
じ都々一』の続編とすると、明治初年の成立である。

以下、関西大学の翻刻。振り仮名は特別なものを除き省略。パソコンで
出ない字は「」とした。

木曾海道六十九次気さむじ都々逸」(表紙)

吾妻雄兔子作

鷲亭系かく」(見返し)

初編既に御被(みそぎ)する。夏越のころ出来すれど。この道元より難所多
く。其処彼処(そこかしこ)に往(ゆき)詰り。二編に至りて遅遠したり然
れど恋路の六ヶ敷に比ぶれば峻山の九折(つゞらをり)も深谷の棧道も誠に
ものゝ数ならずと竊に奮発することありて終に六十九次となしぬ嗚呼大きに
御苦勞千万歳と自ら祝して詞の花唄となしぬ

白山人述」(一オ)

宮腰(みやのこし) ふくしまへ一里半

きそよし仲の城あとありよし仲にめかけ二人あり一をもえといひ一を山ぶ
きといふ二女ともによくたゝかふといへればよしなかのねやのうちおもひや
られたり

あせを流してはだかに成てわたしやかついたみやの輿」(一ウ)

福嶋 あげまつへ二里半

御せきしよ今はなしおんたけ山のとりゐありおんみやまで十り程このへん
の女さつはりとしたることはおんたけ川のながれにてけつをあらふがごとし
とぞ

ぬるりぬるりとする摺小木をなんでふくしまとろゝ顔」(二オ)

上松(あげまつ) すはらへ三九丁

このしゆくふくしまとのあひだにきそのかけはしありねざめのとこのか
たはらにある小のゝたきはすさましくしてねだめ小便のごとすとぞ
くるりくるりと尻ふりまはし杖をあげまつとんぼう荷」(二ウ)

須原 のじりへ一三丁

いづもの明神のやしるあり恋のねがひをかけてよしきそ川のなかれくみて
けしやうの水とすればきめこまかになるといふ

尻の須はらぬうはきといふが言れる程には出来はせぬ」(三オ)

野尻 みとのへ二里半

きその古道ありめいぶつわがふの酒はこんいんのさかづきごとにもちひて

よし

口のうしろのしりからのぞきどこがもるかといふ薬くわん」(三ウ)

三富野(みとの) つまこへ一里半

きそとうげあり鯉岩は恋いわなりゆゑにかたはらにめをのたきそゝぎおち
て水けたくさんなりといふ

恋の深みへはまつたこの身とのごまかせにしたうきな」(四才)

妻籠(つまご) まごめへ二里

きその山中はとりわけさむさつよければ男女いだきつきてねることつねなりゆゑにつまごめもおほくできるといふ

いろにやよけれど妻ごにやよしなしりがはやくて茶わん酒」(四ウ)

馬籠(まごめ) おちあひへ一里五丁

かまくらかいだうありふせやの里あり十曲たうげは十の曲どりをせしところといふもまつたくすけべゑどうしのおちあひばしならんとぞ

思案なかばに鉄炮かとおもやそとで馬士(まご)めがするおなら」(五才)

落合 なかつがはへ一里五丁

かまがはしはおひはぎいでりよじんのかまをねらひしかばんしよをたてこれをきんずよさかのばんしよはよなかのばんしよのあやまりなるべし

すけべゑどうしの落あひなれば根太(ねだ)は夜すがらみつしみし」(五ウ)

ウ)

中津川 おほるへ二里半

花なし山ありむかしこのところの人おほくそうどくにてはなをおとせしかはこの名ありといふつゝしむべし

片時あはねばくよくよするは深い恋路のなかつ河」(六才)

大井 大くてへ三里半

さいぎやうほふしのつかありいせさんぐう又なごやへのわかれ道なりかまど山はおかまをねらふによろしとぞ

おほいおほいと呼のは誰だほれた人なら代でくれ」(六ウ)

大 (おほくて) ほそくてへ一里三十丁

つば岩ほる岩ひはたとつげあり月よし日よしのさとはこんいんをむすぶにいつといふきらひなしとぞ

おほく手のあるお前だなぞとげぢやむかでじやあるまいし」(七才)

細久手 みたけへ三里

おにのいはやにいんらんの女ありてゆげのだうきやうをひとのみになしたりとぞゆゑに一トのみのしみづなほのこれり

心ほそくてひとりはいやよ誰か来てくれわしがねや」(七ウ)

御嶽(みたけ) ふしみへ一里五丁

おにのくびつかありありはらのゆきひらのつかは川のむかふにありゆきひらにほれたる女のたてしものとぞ

みたけ首つたけ天窓(あたま)まではまるもふ一ヶ所はまれば夫でよし」

(八才)

伏見 おほたへ二里

めいさんみのがみはけいちうにもちひて音するゆゑわるしはちやがきのあま口はよけれどせきのかちの刀のきれるといふは恋ぢにはすこしいむべし

またをひらいてうつ伏しみれば御嶽浅間も尻の下」(八ウ)

太田 うぬまへ二里

いはやのくわんおんは恋のねがいをかけてよしもちふものなら冬もかたびら山のけしきいとおもしろしとぞ

おほた初手から身にしみじみとあてにならないうはきもの」(九才)

鷓沼 かなふへ四里八丁

はりつなのじんじやさいれいにぎやかにしてわかき男みなまつりの女をぞめきにいづるなりゆゑにはりつなの名ありといへり

うはきよして見ろうぬまアほんにたゞは置ぬとうでまくり」(九ウ)

加納 ごうどへ一里半

なから川はうかひのめいしよなりぎふは妓婦のあやまりにてむかしこのところにげいしやおほくすみたりとぞ

願いくひかなふと御くじにやあれどすゑをまてとは気がながい」(十才)

河渡(がうど) みえじへ一里六丁

むしろ田はある男女をつれきたりいぬるにふとんはないからひくものはむしろだといひしよし名となる女はむしろのたかひくにてせなかないときゆ糸ぬき河かたはらにながるゝとぞ

何のがうどでわしやこのやうにあかいお芋が恋しかる」(十ウ)

美江寺 あかさかへ二里八丁

むすぶの神のやしるありねがいをかければりやくはやきことくひぜ河のがれのごとしゆ糸に子安くわんおんはあかさかのしゆくのかたはらにあり腹がへつてはみえじはいらぬ其所らさがしてつまみ喰」(十一オ)

赤坂 たるゑへ一里十二丁

日もく上人だびつかありまたかぶとつかはあをはかのちやうじやがてるてのひめのねやへわすれてゆきしをうづめしものとぞ

なんのあたまがあか坂などゝ言れなからものぼせしやう」(十一ウ)

垂井 せきがはらへ一里

のがみのさとのかたはらにはんによのきうせきありいぶぎの山の名ぶつもぐさをすゆれば大いにじんきをたすくるとぞ

よだれがたるいと笑はゞわらへみとれりや誰しもこんなもの」(十二オ)

関が原 いまずへ一里

月見のやしるありふはのせきのあとありこのところ月あかるきころはねやのうちはともしびをおかず月あかりをもつてともしびとするとぞ

鰻鶏卵(たまご)のせいきもいつか尽て賢きよのせきがはら」(十二ウ)

今須 かしはばらへ一里

くるまがへしの坂ありねものがたりのさとはみのとあふみのさかい也みのゝねものがたりあふみへきこえあふみのねものがたりみのへきこゆまれにはまくらのおともきこゆるとぞ

ぬらしておきなよ今するとこだ坊のあたまのさかやきを」(十三オ)

柏原 さめがゑへ一里半

やまとだけのみことのこしかけ岩ありまた西行水ありさいきやうほふしゆきゝの女のうつくしきをみて水をいたせし河とぞ

白のお酒を一合のんでふとんかぶつてかしはばら」(十三ウ)

醒井(さめがゑ) ばんばへ三十丁

三水四石のめいしよありやまとだけのみことみさめのしみづは町のなかほどにありくみてほんのうのねつをさますべし

夢はさめがゑ大摺小木(おほすりこぎ)がまたで突張夜あけがた」(十四オ)

番馬 とりゑ本へ一里六丁

よごのうみまたひはのうみありあさまのさとはもといふ女ありしところつしままつりは男をかさねしかつだけ女なべをかぶるといふ

見ては新造いろには年増せわはばんばがよくとゝく」(十四ウ)

鳥居本 たかみやへ一里半

小まちづかあり小まちししてのち小まちといねたる男もはやよぎもふとんもいらぬとおのおのこのところへもちきたりすてたるゆ糸そのところをとこの山といふ

呑で水性(うはき)でお花が好でなにがお前の鳥ゑもと」(十五オ)

高宮 糸ち川へ二里八丁

四十九いんゆるねんじありめいぶつのたかみやぬのはおつこちのみやげにするにめうなりとぞ

いきがたかみやしづかにしなよ隣りざしきはまだ寝ない」(十五ウ)

愛知川(糸ちがは) むさへ二里半

めいぶつの一けい茶きつすべしごくごへはかくしばい女をかいにゆく山みちなりといへり

宿は糸ち川わしやまゝのかはあつてお前の面のかは」(十六オ)

武佐(むさ) もり山へ三里半

ちやうじやのからうすありほばしらくわんおんを男のほとけなりと思ふは
ひなり人をほばしらのごとくにする女のほとけなりといへり
齒くそ目やにゝ涎とはなでむさくするのも女よけ」(十六ウ)

守山 くさつへ一里半

くさつ川はなりひらのあそんこの川のほとりにてほゝあかき女に出あひ
ヲゝくさやといふてつをはきたまひしかばくさつ川の名ありといふ

孫をもりやまする年でさへ何様(どう)もうはきはやめられぬ」(十七オ)

草津 おほつへ三里半六丁

とうせんだうととうかい道のわかれ道しゆくはづれにあり石山のくわんの
んにむらさきしきぶがげんじの間を見てきをわくるものおほしとぞ

ほゝの赤いので草津と知れどねれて嬉しいうばか餅」(十七ウ)

大津 さいきやうへ三里

てんちてんわう大つのみやをつくらせたまひしところにてしはる町のいふ
ぢよはおさおさ三都におとることなしあげてあそぶべし

わたしや大津の牛ではないが恋のおも荷をひきあぐむ」(十八オ)

西京(さいきよう)

きやうとは女のさいたい一にしている白くきめこまやかにしてもものいひや
さしくとりまはしなまめかしければしよこくの人々これがためにこしをぬか

さぬはなしじつに婦人の美をきはめゑんをきはむることこの地をもつてせか
いの冠となすべし」(十八ウ)

ぬしは京都の鴨川ぞめよ人に目だつてうつしくい」(十九オ)

附録

大坂 京都より十一里

これまたいろの大みなと恋のみやこのさい大なるものにして今芝ゐにてす
るみちゆきのしんじうはみなこの地の男女にして東京さい京にもまさるとこ
ろのもたつきありまづしんまちのあたりよりためすべし

梅の花さく難波の人をすいといはないものはない」(十九ウ)

関西大学図書館蔵書は、著作権の切れたものについては、許可を願い出る
ことなく、自由に翻刻してよいとのことである。本書の著者の白山人は吾妻
雄兔子こと梅亭金鷲であり、明治二十六年(1893)である。著作権は消
滅している。

九、『よしこの故能和多橋』(国立国会図書館蔵本。図書番号は特55-403)

編者近藤巴太郎の生没年は不明だが、同人の著作は、国会図書館の「近代
デジタルライブラリー」において、「この図書は著作権法第92条による文
化庁長官裁定を受けて公開しています。」とされている。著作権は消滅して
いるものと考えてよい。

国会図書館蔵書は、著作権の消滅しているものについては、自由に翻刻し
てよいとのことである。

よしこの故能和多橋

近藤巴太郎編輯(扉?)

四方の通子を杖となし東海道を笠に着てよしこの集(ほん)の初編(はつ
たび)にまづ手土産の妓(こ)の腸(わた)多留粹心にあふか間の駅(しゆ
く)(名所古跡ももらしなく路程は一百三十余里たゞひとすじに三弦(みす
じ)の糸みち不二山(たかいやま)から谷素湖(たにそこ)も瓜や茄子(な
すび)の(下等(へた)撰者滑稽(しやれ)と胡盧(ごろ)とをたねとして人
情風化の導に漸々(やうやく)鄙の(かたこと)にててにをは仮名の間ち
かひは見ゆるしたまへと一寸序文(ざつき)に

誌者は

蚊雷居巴太郎(序)

西京 二リ廿六丁

花ともみちのいろかにくれてあかぬにし山ひかしゃま(ヤハキ 旭山)
色に出口の柳のめにもそれとしられて露をもつ(平井 坂田楼)

人をはかると狐の火こる井筒のしたのはふかい智慧(水島住 実河良)
世にも鳴神はつねのいるに客をひくのも三味のいと(タキ 漉水)

なにも鴨川人目の網にもれしたがひの鷺しらす(岡サキ 新富貴屋礼)「(一オ)

鶏のそらねもよにあふ坂もしつてゆるさぬ恋のせき(タカハマ 清婦)
へたてられても命をかけてしのび逢坂関所ごし(ヲカサキ 植田屋常吉)

うき名つゝめどあふさか山の関のしみづはもれやすい(アラ井 黒主)
こよひ首尾してあふ坂山とこゝろ関寺小町漬(ナゴヤ 西川小松)

ともに走井なかれの身では人目の関路はとふしれぬ(東京中ばし 彫千)「(一ウ)

人のうはさに気は走り井のみづになかれのます苦勞(ハマ、ツ 紙屋豊吉)
大津 三リ半六丁

こひの重荷であけくれかよぬしに大津の車うし(風琴)
よくも大津絵りんきのつのおつて手くだのかねしもく(トヨハシ 鶯鳴)

浪のしらべる琵琶湖の音もてうし粟津のさよあらし(二川 穂々丸)
ぬしをまつばら夜もいつしかとふけて粟津の身のつらさ(トヨハシ 鳥

声)「(二オ)
ゑんもむすべはこれから崎ははれてそひねを一ツ松(ナゴヤ小田原町 山田

ゆづ)
はれて近江になつたる今宵なぜかこゝろが浮御堂(トヨハシ みそじ)

ぬしにこゝろをまか瀬田蜷くちをあくたびあかゞ出る(桜連 湖流)
矢橋こゝろにつひ蒸気船ごねにや石炭たくおもひ(ヲカサキ 亭小八重)

こゝろ八景わからぬうちにわたしやのり出す矢橋舟(トヨハシ 松樂)「(二

ウ)

部屋の内、艸津らいをこらへこよひ大津のうすけしやう(大サカ 錦平)
草津 三リ

人が草津で八景をみれば矢はせ粟津で出るつらさ(小望 義?)
呼はる女の気もやはらかにねれてほどよい姥か餅(二川 穂々丸)

すいつすかれつこの梅の木に花のしたひもとけたなか(岸舎)
石部 三リ半

関伽ぬこゝろをたかひにくむはかたい石部の金勝寺(二川 思顔)「(三オ)
ふかくむすびて見しまさ夢は水の出刃屋のにひまくら(ヲカサキ伝マ 八重

咲小久)
水口 二リ半七丁

かぶせかけたる水口ぎんもはげて地鉄(ちがね)のてるきせる(下地 一

玉)
土山 二リ半
おもひあひ性のわしや土山で縁を木櫛にむすぶ髪(緑水)

はじめ鈴鹿でいまさらぬしにあふて辛苦のます峠(サクラレン 湖流)
坂下 一リ半十六丁

きれてしまふと筆捨山が画そらことにもかゝりよふか(岸舎)「(三ウ)
狩野うらみの筆捨よりもかはりやすきはぬしのむね(ヨシハマ ヘト)

関 一リ半
こゝろせきなるわたしのねがひとへどこたへぬ石地藏(トヨハシ 鎗安)

龜山 二リ
よはひ久しき鶴龜山とおもひ相生かざり台(二川 琴月)

よろづよまでもかめ山なれば恋のしようやどかへはせぬ(トヨハシ 山毛)
庄野 廿七丁

きては義理をはかけひきばなしどうか庄野といふこゝろ(トヨハシ みそ

じ) (四オ)

むしのついたる箱いりひなはいけん庄野もきゝはせぬ (トヨハシ 酒好)

おもひこがるゝ身は焼米よなんと庄野のたわらいり (トヨハシ 菊岡花香)

石薬師 二り廿七丁

やわらぐやうにとがんごめしてもぬしはかたぎの石薬師 (二川 穂々丸)

そふてたかひに杖衝 (つえつき) 村とかたひちかひのいしやくし (二カトリ

松霞)

四日市 三り八丁

龜のうちわけ日永のひものとけてあふ夜も四日市 (ニヒホリ しらはへ)

(四ウ)

あつくなたるひながの団扇しばしはなれてくらされぬ (ヤハタ 立野女)

うひてながれのこゝろのそこは水にしれたる朝明 (あさげ) 川 (一二三)

桑名 海上七り

むねに桑名のやきはまぐりがほつと吹出す屋気楼 (二川 穂々丸)

其手桑名や焼蛤のこかれて見せたる貝がない (ナゴヤ 美宗)

なさけ白魚そひますなぞとの手桑名のはかりこと (トヨハシ 緑水) (五

オ)

桑名いつとめと人にはみせてふさぐ目もとにふるしぐれ (ヤハギ 十々丸)

いつも其手は桑名いわたしぬしを真帆にはかけられぬ (ナゴヤ 水月)

みえる神戸 (こうど) もこゝろがのればほんに間遠のわたし舟 (トヨ川 水

鳥)

宮 一り半六丁

さがが熱田じやしのんてこよひうはきならずの梅のはな (ナゴヤ 中源)

恋のねかひのほんもつとけてさけあつたの宮まいり (緑水) (五ウ)

藍といわねど気は間松のかほにはづかし紅しぼり (東陵)

底にきつかずこゝろの箍 (たが) のゆるみてみだるゝ桶狭間陣 (ヲカサキ

梅山)

胸も前後で落合つかぬ袖もなみだになるみぞめ (サクラサ 七五三)

もゆるおもひに前後もわすれむせぶなみだの煙艸 (ヲカサキ 雪枝)

はれてよなよな逢妻川でつゝみかくさぬ水こゝろ (花暁) (六オ)

はしごだんから名を呼?の浜はこよひのまはし家 (タカハマ 湖月)

ぬれて嬉しや笠寺さまの大慈大悲の御利生雨 (ベツゴ 梅琴)

鳴海 三り一丁

明る星崎かり寝の夢のさめて千鳥の泣わかれ (カモ 実河良)

恋も間路とはや鳴海潟うらむ千鳥のなき別れ (タカハマ 詞睦)

しぼりあげたるたがひのからだもはやきまゝになるみぞめ (トヨハシ 十々

丸) (六ウ)

知立 三り卅丁

さむい色でも三河の綿はいれりやたがひに厚衾 (赤坂 高田屋多津)

ぬしの気ひつがあらしじやゆへにすへはちりふのあださくら (二川 穂々

丸)

あふてうれしく手にてをにぎりむねてうなづく馬の市 (トヨハシ 茶楽齋)

せけんはれてのぬしや市の客ふかく御ゑんをつなぎ駒 (タカハマ 詞睦)

池んきかする鯉ちのせたいいつ?へたよりをまつ井鮒 (チリフ 柳司) (七

オ)

うそとまことの文かきつばたひく手あまたの蜘蛛いと (タカハマ 湖月)

たとへ向ふは焼餅屋でもわしはたちよる水囊蕎麦 (ニイホリ しらはへ)

岡崎 一り半七丁 岩津天神社 一り半

直 (すぐ) なわたしの岡崎紡車 (つも) をまげて今さらきれるいと (常磐

連)

矢作とふれは浄瑠璃姫のむかしがたりになきおとし (秋風)

軍 (いくさ) みかけてやはぎのさとのこひも其?のできこゝろ (二川 穂々

丸) (七ウ)

粹にそひたひ神へのなぞでなにも岩津にたちし梅 (近藤愛子)

ほれたおまへの美婦 (系によつほ) 山とうき名たつなら明大寺 (みようだい

し) (ヲカサキテンマ 尾張屋小松)

きてもあわゆきあはねばほんにうらみ升屋のうらざしき (ヲカサキ 版吉)

なごりをしさにいつあわ雪ときくも山葵のなみだごへ (岸吉)

岩にせかれし早瀬の水もすへはいつしか大屋川 (ヲカサキテンマ 政野屋千

代吉) (八オ)

藤川 二リ十九丁

藤川のなかれつとめの身をせぎとめてはなれ舞木の測となる (ミヲホノ 天

重) 先のこゝろのむらさき麦としらて起証をかきつばた (トヨハシ 鳥声)

たとへ親御はおゑんま堂でもすへは衣文のいつしん寺 (伝馬町 種源)

秋はせぬかどつひ気をもみぢしばしおかほも宮路 (みやぢ) 山 (イハゲ 東

陵)

赤坂 十六丁

こゝろ赤坂きをもみぢばのいろにいでゝもぬしのため (ナゴヤ じんか

ぎ) (八ウ)

つきぬ咄しに夜はあかさかのそでもなみだにぬれたなか (クハコ 要人)

御油 二リ半四丁

うはき下御油せかれてあふせねかひかけまの鳥居さき (トヨハシ 一瓢)

あふも玉鮓とよかはさんへ願をかけまのもとりみち (ヲギハラ 秋風)

ぬしをいなりのねかひもとげていまじやうれしく 枳尼天 (だぎにてん)

(札木町 木原屋久吉)

耳は籠でもとめてみれば玉に鳥居のあらおまへ (平サカ 定吉) (九オ)

豊橋 一リ半十二丁

おもひわたりし身はとよはしのながくうはきを通し櫃 (ぬき) (トヨハシ 広女)

音にきこえて身はとよはしにばつとうき名を揚花火 (下地 一玉)

むかし雲井へ納めし豆のころもかけしも寺の伝 (トヨハシ 茶染齋)

二川 一リ廿一丁

かわひらしさに二川目もとそれと岩屋のぬれ仏 (トヨハシ 松楽)

ふかいあさひの二川ながれせぶみしらずののぼり鮎 (二川 琴月) (九ウ)

故能和多橋

はしめのつゝき

よしこの東海道五十三次
みよし (間紙)

国産

木綿

岡崎女郎衆

全 紡錘

豊橋納豆

刈谷白魚

佐久崎海鼠揚

八帖味噌 (間紙)

新所 海上六丁

いまはうれしや新所をもちてくらすおまへとわたし舟 (ヲカサキテンマ 宮

川屋染松)

白須賀 一リ廿四丁

なさけ白須賀そのよしあしもつらや片葉のかたたより (ハマ、ツ 嶋屋豆

八) おもひ高師のやまやまなれば鹿も音になく恋もする (タカス 眠霍)

人はしらすかとはおもへどもいつかうき名の高師山（下地 一二三）

荒井 海上ーリ

あら井風をもいとひしぬしをしらぬ人手にわたし舟（札木町 菊岡君香）

（十才）

浪風のあら井辛苦もいとほぬわたし人目の関所もやふれかけ（下地 雪舎）

あら井おまへにしんからほれてわたしやうなぎでのろくなる（ヲカサキ 麩屋長）

あら井だてすりやぬしやとろうなぎわたし舟こそあかはない（トヨハシ 山毛）

いろも香もあるまひさか海苔は麩朶（ひゞ）にはなれぬわたし舟（ニイホリ 花暁）

わたし舟にもつひ海苔かきてまいさかよき汐まつばかり（ヲカサキテンマ 松嶋屋栄）（十ウ）

浜松 四り八丁

萩の花つま引馬のつゆにみだれそめたるすり衣（岸舎）

浮名ばかりか立場とおもやそへぬふたりか中の町（トヨハシ 緑水）

見附 ーリ十八丁

そのつめたひ性根をわたしやちらと見附の浅黄足袋（下地 一二三）

ふかひたくみにこそかけたびとおもふ手事を見附宿（下地 一二三）

しのぶ見付の足袋かさなりてもはやこよひが三香野坂（ツ、ミ 木綿舎）

（十一才）

袋井 二り十八丁

ふうじ袋井こゝろをこめてかよはすかしくの文だより（トヨハシ 松樂）

うき名いとへば状袋井も人目のぶのすりもよふ（下地 みそじ）

いのちあづけて起請はわしがまもり袋井いれてもつ（トヨハシ 酒好）

掛川 ーリ廿九丁

なさけかけ川紐つけしたはほんにお客のくづばかま（トヨハシ 深流亭）

日坂 ーリ廿九丁

妹かくちにはつひうまうまとくるてあぢないわらひ餅（二川 穂々丸）（十ウ）

（十ウ）

人の手まへを曲物飴でうまくかさねてむすびたい（チリフ 露月）

そへぬふたりがこの中山をおもひ出しては夜泣石（ヲカサキ 松嶋屋玉）

いけんきかずに情立場茶やいまはたがいに夜泣石（ヲカサキ 種源）

ふかい中山せかれていまはみず菊川このくろう（ヲカサキ伝マ 扇屋たつ）

（つ）

金谷 ーリ

ぬれて逢瀬のねかひが金谷ふかきそこひも大井川（ニイホリ 花暁）（十二才）

ねがひ金谷と思ふてゐるにさきのこゝろの大井川（ヲカサキ 俵山）

したり大井川恋路のやみにまよひはじめはほたるかり（古井 豊旭）

嶋田 二り九丁

つらい苦界に身をなげ嶋田うかむ瀬をまつ大井川（雪舎）

藤枝 二り廿九丁

かためかけてもゑん藤枝になりてくろうを作り鮫（一玉）

ながい藤枝松みにかゝり山葵やなきだす漬物屋（ニイホリ 花暁）（十二ウ）

（ウ）

岡部 二り九丁

来ては居つゝけ宇津谷峠はなれかたなき蔦かづら（緑水）

もはや三字を宇津谷峠道もなかなか十団子（伝馬町 有川楼雪）

鞠子 ーリ半

こひもつすひもわしやしらまりこぬしにまかする色のいと（タカハマ 湖月）

（月）

とけつもつれつくろつをかさねまるくなりたる糸まりこ(みそじ)
せじでころばす阿部川ゆへにあひにお客がきなこもち(同 出たらめ)(十
三才)

静岡 二リ廿七丁

あかせぶるまひするがの紙にやぶれかふれのなぶりがき(東陵)

富士の山ほどつきなはたてどいつもつれなひ三保の松(黒主)

江尻 一リ三丁

せなと瀬名川たがひにやめていまはこゝろも清見かた(ナゴヤ かんかん
や)

興津 二リ十二丁

客とまふとに出てなくなみだぬるゝ袖師の浦おもて(トヨハシ みそじ)

山のかみじやのさつたのなぞとぬしにはるみちてきたゆへ(同 山毛)(十
三ウ)

親も子しらず子も親しらずいつかさつたの山の神(トヨハシ 松楽)

恋のやみちの倉沢あわびはれていはれぬかたおもひ(アラ井 黒主)

つとめはなれて倉沢なれは小指や榮螺(さゞい)のつのである(伝馬町 種
源)

あへぬかんばら由井たひことを興津みすぢになきあかす(ヲカサキテンマ
梅村屋染)

由井 一リ

辛苦するがのわたしにむりをきてはいちいぢ由井なんす(イハツ 東陵)

(十四才)

蒲原 二リ四丁

なにを塩はまわかれの宮とかんばらきばやにたゞしやんす(トヨハシ 文
持)

吉原 三リ六丁

ほんにあいきよもよし原まくら寝かほやさしき富士びたひ(トヨハシ 緑
水)

首尾もよし原おもひもはれてふしのこげんに雪のはだ(トヨハシ 雪舎)

原 一リ

不二の雪ほどつむかんなんをとけずいぢもつぬしの原(ヲカサキ 俵山)

くろつするがのアノふじさんも見れはおもひのつもる雪(タカトリ 柳
水)(十四ウ)

親の手綱のきれたるうらは不二野馬のはながひ(チリフ 柳司)

よわい足柄山いをおしてぬしをちからの関所こえ(ヲカサキ 彫孝)

沼津 一リ半

ともにつきは千貫樋(とゆ)とちかひするがの国さかひ(ナゴヤ長者町
小友)

三鷹 三リ廿八丁

月のいりくちまつよはふけて顔も三鷹のあけのかね(トヨハシ 緑水)

あふてはつゆめみしまのこよみうれしこよひの姫はしめ(トヨハシ 山
毛)(十五才)

胸のふさがりはやあけのかたおかほみしまの巻曆(岸舎)

箱根 四リ八丁

あけてわかれりやはこねの矢竹すぐにこよひのふしをまつ(水鳥)

小田原 四リ八丁

小田原はかりてぬしやういろつや実がくすりにして見たい(岸舎)

大磯 廿七丁

はれてうれしくけふ大磯にこゝろせわしき化粧(けはひ)坂(二川 琴月)

かたくちきりてまた大磯に石をのこせし虎御前(ヲカサキテンマ 扇屋小や
す)(十五ウ)

平塚 二リ九丁

たまに大山気は石尊にしるぶ人目の前不動（ナゴヤ水？先 小牧歌子）
顔はひらつかあたふく助とそはせたいこの持あそび（トヨハシ 緑水）
藤沢 二り

いろのゆかりの藤沢宿にたより江の鳶道がつく（ウノヤ 二本坊）
みがきあげたるみさほの鏡いまにくもらず照手姫（クハゴ 千枝）

戸塚 二り九丁

そへにや命の境木なればとくとしやんせ科（しなの）坂（トヨハシ 鳥
声）（十六才）

程谷 一り九丁

もはや時刻もよいほどがやとむりにお客をひきて茶屋（トヨハシ 鎗安）

神奈川 一り半

文字のながはてにをはあはせかみにちかひのむすびぶみ（岸舎）

ぬしのこゝろか浦鳶寺やあけてはなせぬ玉手箱（ハマ、ツ 嶋屋小しん）

川崎 二り半

すゑを弘法大師とおもやさきの遍照（へんじよ）かきにくはぬ（東京ヤナギ
ハシ 彫兼）

恋のいろはをならふたうへはぬしを大師にするこゝろ（ヲカサキテンマ 豊

田屋小梅）（十六ウ）

うその川崎万年茶漬うまひ手ごとのくはせかた（一二三）

しのび大森たがひにいまはすいな気あぢの梅ひしほ（一玉）

馬の鈴石またからすいしきひて八幡のあさまうで（ナゴヤ みのやれい女）

品川 二り一り

四十七士の名も高輪にのこす忠義のかな手本（近藤愛子）

恋の仇討ほんもうとげてもはやうはきは泉岳寺（緑水）（十七才）

時も八ツ山よもやにくれてまちしたよりも浪の音（広女）

辛苦品川あまたの客にたえずこゝろを沖の石（同 雪舎）

ひらくあふきと不二さへ見ゆる国のかなめの日本はし（ヲカサキ すし貞）

五十三次よしへだつともこゝろ一時の伝信機（同 近藤愛子）

あきらかな御代のしるしの夜は瓦斯燈に見へてにぎわし日本はし（蚊雷
居）（十七ウ）

よしこの都々一はすへて恋情を常として作する多し余か著すところは勸懲文
化を原となし恋九これにつくよつて此道の好風に作意を一変し出詠あれ遠か
らす官許を得て後編は木曾街道六十九次を出版す

編者白

明治十三年四月七日御届

同 年八月三十一日出版

編輯人 愛知県平民

近藤巴太郎

愛知県三河国額田郡

康生町五十四番地

出板人 同県平民

天野重助

静岡県遠江国敷智郡

紺屋町八十四番地（裏見返し）